

第4回『「ひと」と「暮らし」の未来研究会』 議事要旨

1. 日時：令和3年6月14日（月）13：00～15：00

2. 場所：オンライン

3. 出席者（敬称略）：<コアアドバイザー>

青木 純 （株）まめくらし 代表取締役 / （株）nest 代表取締役

川人 ゆかり 合同会社ミラマール 代表社員

古田 秘馬 プロジェクトデザイナー （株）umari 代表取締役

<ゲストスピーカー> ※発表順

丑田 俊輔 シェアビレッジ（株） 代表取締役

村瀬 茂高 WILLER（株） 代表取締役

安達 鷹矢 （株）Local PR Plan 代表取締役

公益社団法人全国宅地建物取引業協会連合会

一般社団法人全国賃貸不動産管理業協会

公益財団法人日本賃貸住宅管理協会

公益社団法人全日本不動産協会

4. 主な議題

- ゲストスピーカーより取り組み事例紹介
- 「beyond コロナの新しい暮らし」についてフリーディスカッション

5. 主なご意見等

- 秋田県五城目町の茅葺の古民家。自分が一世帯で住むのはちょっと荷が重く思っていた時に、一人ではなくコミュニティでシェアしていったらいいのではないかと、仲間たちと活動を始めた。古民家を「村」に見立てて「村民」を募り、その年会費を「年貢」と名付け、「シェアビレッジ」というコンセプトを創り、コミュニティで共有資源としての古民家を一緒に盛り立てていった。
- 都会と田舎の二項対立構造が結構根深くあるということもあり、それを越えたいと思った。どちらにも学び合うこともあり、一箇所に決めない人はこれからもっと増えていく。住民票を越えた新しいコミュニティ・共同体があるのではないか。
- 「越える学校」というコンセプトが町の中の人から出てきた。学校の中の図書室を地域の図書室とオーバーラップさせ、学校空間に町民が日常的にいられるような学校にできればと。小学校という壁を越え、地域にもっと開いていこうということが軸になっていった。
- 地域の外とも壁を越えて行く取組が進んできた。秋田県は、「教育留学」という制度を小中学校で持っており、転校のため移住をしなくても秋田県内の学校にオーダーメイドで一定期間通える。

- ▶ インターネットで世界中のいろんな方々の講座を聞くというところも含めて学習環境がテクノロジーによって進化し始めてきている。新型コロナウイルス感染症下のリモートでの学習環境も含めて学校外での学びを自律的にスタートできることが進み始めている。
- ▶ 学びの舞台というのは、学校の中だけではなく、ストリートに溢れていくのではないかと考えている。いろいろな人たちが、ストリートをコモンズとし、自分ごととして向き合うことで、新しいチャレンジが生まれやすくなっている、ということがこの5年ぐらいで少しずつ起こっている。
- ▶ 皆で持ち寄って育む村のようなコミュニティ・共創型・共に作るコミュニティが非常に大事であり、またパブリックでもプライベートでもない共(コモンズ)の領域がくらしの中により混ぜ込まれていくところがこれからのくらしのヒントの1つになってくる。
- ▶ コミュニティは、メンバーの人数が大きくなればなるほどのコミュニティ感が薄れてくるトレードオフになっている。小さなコミュニティを、誰もが自分のローカルだったり、自分のつながりの中で作っていけるようなところがもうちょっと当たり前になり、それがお互い緩やかに繋がり合うことで一つの経済圏だったり、豊かさが滲み出ていくといった社会を実現していきたい。
- ▶ 住まい方が非常に多様化していく時代になっていく。所有の権利、利用の権利の法制度の面も含め、しっかりと整えながらやっていけるといいと思う。
- ▶ コミュニティが豊かにあることで、田舎であっても住宅を、例えば数年後に引っ越す時に誰かが買ってくれるなど、二次流通が起きていく可能性があるのではないか。住宅とコミュニティが絡み合っていくことが非常に大事だと思っている。
- ▶ コロナの中で、「stay with コミュニティ」感が非常に高まってきたと思っている。溪流・湖・海といったローカルな環境、そこにいる人や人以外の自然界も含めた非人間的な存在も含めたコミュニティといった、東洋的なコミュニティ論に近いところから何かを湧き上がらせていけるのではないか。
- ▶ 今の時代は村 3.0。村 1.0 のコミュニティは人間の群、自然と人間が生き延びるために集団を作っていくという時代。村 2.0 のコミュニティは土地を通じて人間を補足していくものであり、それが管理とか統治というシステムにひとつのクッションになるような存在。村 3.0 のコミュニティは、土地や住民票に完全に縛られるのではなく、ローカルな物理的近さが変わらず価値を増していく中で物理的な制約を超えたコミュニティが統合され、デジタルツールも使いながらリアルとバーチャルが融合していく。
- ▶ お金を出して消費していく営みも当然合理的なので残っていきつつも、それと同居する形で、コミュニティの中で参加したり贈与したり、パブリックとプライベートの間にあるコモンズみたいなものをみんなで維持してそれを楽しんでいくことが、豊かさの1つになっていく。

- コロナ後のニューノーマル・新しい生活に向けた移動サービスとして、人と人、もしくは人とまちの絆を深めるようなオンデマンドシェアモビリティサービスを考えている。自分たちが希望する移動サービスを近くに住む 100~200 世帯の方が集い、お金を出し合って「共有交通」を作る概念。
- コロナが落ち着き始めると、在宅のついでに自分たちの地域をどう回るのが、どう地域を自分たちの価値のあるコミュニティにしていくかが非常に重要になると思っている。
- 都会では近隣の方々とのつきあいが薄くなり、地方でも以前より近隣の付き合いが薄れてきている。これまで自転車で移動していたよりももう少し遠い距離まで行けるモビリティサービスができると、新しいコミュニティができる。地域全体の人の移動が活性化し、同時に近隣同士の人と人との付き合い、人とお店の付き合い、絆ができていくことで地域社会を活性化ができればと思っている。
- 買い物に行く・病院に行く・保育園に子供を送ってから駅に行く、だいたい半径 2 キロぐらいの中で、行動の 80%・90%をしている。ここに AI ルーティングを活用し、呼べば自分の家まで迎えに来て行きたいところに乗せていってくれるオンデマンドサービスが構築できればと思っている。実は今までこの領域には公共交通というサービスがなかった。
- 最終的に人と人のふれあいや出会いが増えてまちに新たな文化ができる。モビリティにより全てのまちに既存の文化にプラスして新たな文化ができるようなことが出来ればと思っている。これまでの交通は移動ツールであり、そこにコミュニティが生まれ、文化ができるという考え方がなかった。
- 家族みんなが使い、まず家族のコミュニティを作る。同時にそのコミュニティが他の家族と一緒に新しいコミュニティを作っていくような、そんなことができたらなと思っている。
- 電力・水道・インフラというのは行政がやるもので、自分たちでカスタマイズするという考えはほとんどなかった。行政だけを頼ってしまうとそれがなくなるところはどんどん廃れていってしまう。だが、「自分たちでまちを作る」「必要なインフラを作る」「地域のインフラを自分たちで持つ」というスタンスが色々なところで増えていくと、地域で利便性のいい場所がどんどん生まれてくる。
- キーワードは行動変容。在宅を含め、家族と一緒にいる、もしくは家にいる時間が非常に増え、その面では環境が元に戻った。人と人が対面でどう動くかがこの近所付き合いの中で非常に大事なことになる。そういった仕組みを移動手段と同時に作っていききたい。
- 地方で事業をやってきたが、経済的な面で人口が少ないのでスケールしない難しさを感じた。ICT で外から人や資産を流入させてカバーしつつ、ランニングコストを抑え、過度にお金をかけないからこそ創造的でシステム化されない偶発的なものや情緒的なビジネスを作りこみ、高単価でそこにしかない価値を生み出して事業を進めていった。
- 里山は自然が共生して手入れがなされているから美しいみたいなどころがある。原生林ではなく人の手が介在して自然と共存していることを伝えていけたらと思っている。

- ▶ 都市部だと新しいものが経済的に価値評価をされて、計画的、合理的、効率的にものが作られている。これはこれで、ものづくり大国日本としての現代の日本らしさだと思っているが、それとはまた別に地域には古いものや受け継がれてきたものがある。歴史的な価値や文化的な価値があり、そこには偶発的に起こったり、恣意的・情緒的に意志選択されていったりするものがあるので、経済とはバランスが取りにくく、コントロールもしにくい、そこに古来の日本らしさがある。
- ▶ 新しいもの、古いもの、便利で経済的に価値のあるもの、情緒的で文化的な価値があるもの、それぞれどこに折り合いをつけるか。新しいものは日常で価値を発揮し、古いものは非日常で価値を発揮する。インバウンドで海外のお客様を呼び、都市部のお客様には価値を伝えていくことを高単価なサービスにしていくことで、集落でお金を稼いでいく。
- ▶ 日本らしく美しく力強い里山集落のライフスタイルを少しだけ経済に寄せるような形で再定義して世界に発信していきたい。SDGsの話もあるが、世界に必ず注目されるものになると思っている。
- ▶ いろいろなお店があるが、それぞれが SNS を使ってどうやって情報を発信していくかとか、WEB を使ってどのように情報発信していくかを学んでもらうと、それぞれが集客力をもつ。
- ▶ 初めのコンセプトを作り戦略を作るところでは、最初は行政を絡めずに、民間の少人数で決めていった。そして小単位で色々イベントを開催するなど、じわじわこういうことをやりたいのだと後付けで周囲に学んでもらう、気づいてもらおうという順番で時間をかけてじっくりやっていった。
- ▶ 地域に説明する時、その場所に住んでいると、どの人に発言力があるかが見えてくる。そして発言力がある方と腹を割って膝を付き合わせて話をする。5年かかったが、じっくりやることが大事。
- ▶ シェアリングエコノミーは元来コミュニティベースで始まっている取り組みだが、グローバル資本主義のプラットフォームに集約される中で、機能性、安さや便利さ、資本力に引っ張られている。そんな中、ユーザーに開かれたプラットフォームとしてどう育てていくか、「プラットフォームコーポラティズム」という言葉でグローバルな議論になり始めている。
- ▶ 人間が認知できる数は 150 人くらいと言われており、肌感覚では同感。テクノロジーが発達する中で人間の認知が拡張し 500 人でもなんとなく誰がいるかわかったりするが、1,000 人を超えるとわからなくなる。
- ▶ コミュニティの「規模感」は 150 から 500 人が適切と思うことがあるが、10、20 人の集落でも十分に自立性を担保できる。少ないほどに濃度高くて互いに理解し合える関係。少ないからこそ理解しあえて、尊重しあうことも大事。ある程度の数になると派閥的のものや、没落する人もでてくる。
- ▶ 規模の議論も大事だが、規模を凌駕する世界もある。文明が豊かになる一方、個人の幸せなど均一化で失ったものがある。「自分たちの」ものをお互いに分かち合い連携することでそれぞれにメリットが生まれる。均質化と逆に行く個別化が進み、連携することで新たな価値が生まれると感じた。

- コミュニケーションとしてのコミュニティ、交通・インフラとしてのコミュニティ、行政に関しても最低限のサービスを保てる人数のライン、それさえ守れば小さな世界観でもコミュニティは作れる。今までは全方位からのニーズを満たすサービスをしようとするのでやりづらくなっていた。
- スケールを大きくしていくことで偶発性や急に起きる出来事をキャッチアップできなくなると思っている。非日常、ここでしかできないことを体感するためにはスケールの大きさが邪魔してしまう。
- 外の地域との連携はやりたいが、同時並行で自分の住んでいる地域をもっと深堀していきたい。同じように深掘りしている人同士で連携すると面白いものが生まれていく感じがする。
- 規模を大きくしようとするとサービスが下がってしまう。コミュニティに対してちょうどよいサイズのサービスを考えると、交通や電力、教育は行政ではない半官半民サービスのようなものになる。
- 留学生だけでなく学生さんの暮らし方が変わっていくのではないかと感じている。既存キャンパスに通う学生もいれば、アドレスホッパーのようにいろんなところに移り住みながら学生生活ができるのであれば、地域インターシップや学生インターシップを交えてもらいながら、社会に出る前にいろいろな世界を経験する、それが大学の単位に反映することなどが出来るのではないか。
- 実際、全国の地域を見ていると、ここ2～3年で学生が旅をしながら学ぶなど新しい学習の仕方が出てきている。短期的にはコロナで動けないが、今後移動しながらの学びは戻ってくる。
- 画一的ではなく自分らしくどう作るか。豊かさは個人ではなくコウエルビーイングという視点で豊かさを考えられるといい。
- 年収が高いとか、便利なまちに住むとか、ある一定の幸せの尺度が共通概念であったが、幸せ自体やどう生きていくのかが多様化して変わってきている。自分はどこで誰とどのような暮らしをしていたら幸せなのか？自分のポートフォリオ、移動も含めて積極的に決めていくことが大事。
- シェアコミュニティを経験することは、チャレンジのハードル、あらゆるリスクを下げてくれる。多様な人たちの集まりなので偶発性を誘発する装置にもなり得ると感じている。
- 緩やかに進めることはビジネス的にはよくないが、適切なサイズ感を肌感覚で理解でき、リスク・トラブルをケアできる。コミュニティの規模・拡大のスピードなどを理解したうえで設計していくことも必要。
- コミュニティを作らなくちゃ、大きくしなくちゃ、ということで大事なことを忘れてしまわないように。コミュニティは人が集まるようなワクワクしたものでなければならぬと感じた。

以上